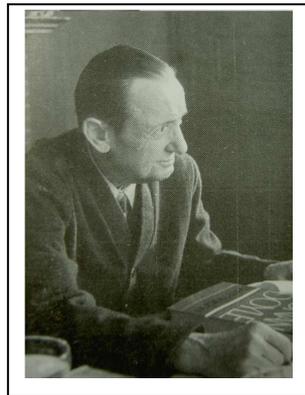


第4回 密室の巨匠 ジョン・ディクソン・カー



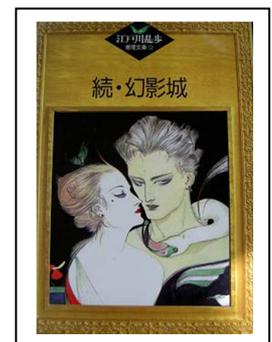
1971年晩年のカー



ジョン・ディクソン・カー

【別名義：カーター・ディクソン】（1906-1977、アメリカ）

さて今回は、クリスティ、クイーンと並んで世界の三大ミステリ作家の一人と称されているジョン・ディクソン・カーを紹介してみよう。まずこの作家に興味をもつていただくために、江戸川乱歩の書いた○「カー問答」を読んでみることをお勧めしたい。江戸川乱歩といえば、名探偵明智小五郎や怪人二十面相、少年探偵団でおなじみの日本ミステリ界の創始者的存在であるが、わが国への海外ミステリ紹介のパイオニアでもあった。その乱歩が戦後まもなく執筆したのがこの「カー問答」で、ご隠居が若い衆にカーを紹介するという落語のようなスタイルで書かれた評論である。カーの存在がまだほとんど知られていなかった当時の日本において、カーの魅力を伝えようとして書かれたこの評論は、乱歩のカーに対する熱愛、いや偏愛ぶりが直に伝わってきて、これを読めばカーが読みたくなること必至である。書かれた時代が古いため、現在ではいささかデータが古くなってしまった感はあるが、それを凌駕する的確な論評は永遠不滅のものであろう。この「カー問答」は現在でも◎『続・幻影城』（★901エ 講談社）で簡単に読むことができる。



カーの三大特徴

ここで乱歩が挙げているカーの三大特徴とは、不可能興味、怪奇趣味、ユーモアの3つである。第1の不可能興味とは、一見犯行が不可能としかみえない犯罪を好んで扱う傾向のことである。このような犯罪を「不可能犯罪」と呼び、その代表が「密室殺人」である。犯行現場には内側から鍵がかけられていて、誰も出入りすることができないという設定が純粋な密室殺人であるが、

人の目が鍵の代わりをはたすものや、部屋ではなく庭や通路や屋上でも同様な状況なら広義の密室と呼んで良いだろう。カーはこういった密室殺人のみならず、死体の周囲にあるはずの足跡がないという状況（これを「**足跡のない殺人**」とよぶ）、衆人環視の中で人が消えてしまうという状況（これを「**人間消失**」とよぶ）、はるか遠方にいる相手を念力で殺してしまうという状況、さらには限定された容疑者全員の指紋が現場に残された指紋と一致しないという状況など、ありとあらゆる不可能犯罪を扱っている。カーの作品すべてが不可能犯罪というわけではないが、そんな場合でも、最後の謎解きで結果として不可能な状況であったことが判明するケースがほとんどで、まさにカーは不可能犯罪の巨匠、密室の巨匠なのである。

第2の特徴の怪奇趣味もカーの大きな特徴である。これは第1の特徴である不可能興味をさらにかきたてるため、人間業でないならば魔物の仕業かと思わせる演出のことで、当然最後は人間の仕業であることがわかるのだが、それまでは読者は魔物の影におびえながら、読み進めることになるのである。カーの用意した怪奇趣味は、悪魔、魔女、幽霊などは当たり前、さらには吸血鬼、人狼、一角獣、不死の人、降霊術にポルターガイスト、黒魔術などなど。こういったオカルト的なもの以外にも、蠟人形、自動人形、ギロチン、ロンドン塔（ここは英国の王侯貴族が多数処刑された陰惨な場所）、中世の処刑具、エジプトの魔法のランプ、さらには泊まると必ず死ぬ部屋など、読者を怖がらせるためなら、何だって見せてくれる。そしてこれらのオカルト趣味が荒唐無稽に見えないように、その背景に伝奇的な物語まで用意してくれるのだ。呪われた館や一族にまつわる過去の恐ろしい因縁話。まるで実話であるかのごとくたっぷりと語られるこれらの昔話のなんと恐ろしいことか。カーの巧みな話術につかまると、読者は怖い物見たさで、またページをめくってしまうのである。

こんな風にカーを紹介すると、心臓の弱い自分はとても読めそうもないという人が出でるかもしれない。でも心配ご無用。カーはこれらの恐怖感を中和するために、とびきり愉快的なユーモアまで用意してくれているのだ。これが乱歩の挙げた第3の特徴である。カーのユーモアはお世辞にも上品といえるようなものではない。それはチャップリンなどの昔の喜劇映画によくあるような、相手の顔にパイを投げつけて顔中をドロドロにしてしまうといったコテコテのユーモアであり、ドタバタ・コメディと呼ぶのがふさわしいものだろう。中でも◎『**盲目の理髪師**』（★933カ 東京創元社）という作品は全編ドタバタ・コメディで構成されていて、本来謎解きのために仕込んでおくはずの伏線が、次のギャグのために仕込んであるといった感じで、カーのユーモアを味わうには一番の作品である。ただしセンスがどぎつすぎて引いてしまう人が多数出そうだが。



恋愛要素

カーの特徴はこれだけではない。これに加えて恋愛要素も挙げられよう。カーの小説に登場する男女は、毎度違う人物であっても、性格はいつも同じタイプの者たちだ。主人公は、たいがい男気があって、プライドが高く喧嘩っばやい性格をしている。そして彼はヒロインと出逢いやがて恋に落ちるのだが、その彼が恋する女性は、たいがい美人で気だては良いが、活発で男勝りといったタイプ。そして最後には、二人は見事ゴールインするという展開になる。けっして大人の恋と呼べるような深みはないが、こういったロマンスがカーのミステリを読み物として一層魅力的にしてくれていることは間違いない。私も高校生くらいの時は、カーの小説のようなヒロインと熱い恋愛をしてみたいと夢想したものだ。現実にはこんな出来過ぎた女性はいなかったけれど。

カーの語り口の巧さ

次にカーの語り口の巧さを挙げてみたい。カーのミステリにはいつだって独自の世界がある。密室だオカルトだと大騒ぎする物語は、一歩間違えれば幼稚で馬鹿馬鹿しいものになりかねない。しかしカーの場合これが不思議にずっと受け入れられてしまうのだ。カーの描く世界は決してリアルな日常ではない。小説と読者の心の中にだけある不思議な幻想の世界なのだ。そこは時代も場所も超えた恐ろしくも魅力的なワンダーランドだ。まるで芝居小屋か遊園地の見せ物小屋といった感じである。そういえばカーの描く古いお城やお屋敷は、ディズニー映画の童話の世界に似ている。幼い頃に心ときめかせて見たあの不思議の世界に、いつだってカーは連れて行ってくれるのだ。自ら幻想をこよなく愛した乱歩が、カーに強く心を揺さぶられたのもまさにこの点なのだろう。

カーのエンターテインメント精神

以上のカーの特徴を総合すると、それはカーのもつたぐいまれなるエンターテインメント精神と呼べるのではないか。不可能興味も怪奇趣味もユーモアも恋愛も、そして拔群の語り口もすべて読者を楽しませるためのものだといえる。これはカーがアメリカ人であるということに由来するのではないかと思われる。実際にはカーの作品の舞台の多くはイギリスである。カーが幼い頃より憧れてきたのは、ドイルやチェスタトン、デュマ（◎『三銃士』★953デ1.2 の作者）、ステューヴンスン（◎『宝島』★933ス の作者）といった英国小説家たちだったという。そしてカーは自分の大好きだったこれらの作家が描いたようなイギリスを舞台に小説を書いてきたのだ。しかしそれはネイティブの英国人作家たちが描く世界とはどこか微妙に違っている。歴史の浅い新興国であるアメリカの人が、想像の中で一昔前のイギリスを描いているといった感じがするのである。しかしそこにはアメリカ人の血に脈々と流れているエンターテインメントの精神が強く反映しているのだ。あのハリウッド映画やブロードウェイ・ミュージカル、そしてディズニー・ランドを生み出してきたアメリカ人のサービス精神が。したがってカーのミステリは、アメリカとイギリスが奇跡の融合をしたハイブリッド本格ミステリと称してもよいのではないかと思っている。これぞまさにカーにしか描けない独自の世界なのだから。

それでは例によって、以下にカーの代表作5作を選んで紹介してみよう。

1. ◎『火刑法廷』（1937年）（★933カ 早川書房）



【内容】 広大な屋敷を所有するデスパード家の当主が急死。その夜、当主の寝室で目撃されたのは古風な衣装をまとった婦人の姿だった。その婦人は壁を通り抜けて消えてしまう。伯父の死に毒殺の疑いを持ったマークは、友人の手を借りて埋葬された遺体の発掘を試みる。だが、密閉された地下の霊廟から遺体は跡形もなく消えうせていたのだ！ 消える人影、死体消失、毒殺魔の伝説。無気味な雰囲気をはらんで展開するミステリの一級品。

現在、カーの最高傑作として不動の地位を確立した感があるのが本書である。これはとにかく怖い話である。カーが恐怖を中和するためにしばしば利用してきたユーモア色は皆無なので、心して読んでもらいたい。自分の妻が3世紀前の毒殺魔ブランヴィリエ侯爵夫人ではないかと疑い始めた主人公。その疑惑は小さな疑惑を積み重ねることで、日を追うごとに確信に変わっていくのだ。そして主人公の周りで次々と起こる不可解な出来事。壁を通り抜けて消えてしまう女、密閉された納骨堂から忽然と消えてしまった老人の死体。これはやはりこの世のものではない妻の仕業なのか？ 主人公の疑いは深まるばかりである。これぞ不可能興味の極致。そして絶対に不可能と思われていた現象が合理的に解明される解決場面の鮮やかさ。常に不可能状況に挑戦してきたカーであるから、そのト

リックがいつでも納得できる出来とは限らない。そこは名手のことだから必ず何らかの工夫はあるのだが、ちょっと予想外の方向からの説明が行われることも多く、それが予想外すぎて、なんだか肩すかしをくらったような不満を読者に与えてしまう作品も多い。しかし本作ではそんな不満は起こるまい。正々堂々としていてしかも意外なトリックなのだ。そして実は本書の魅力はそれだけではない。すべての謎が解き明かされたと思った後に、さらに明かされる驚愕の事実。後頭部をいきなり金槌で殴られたような衝撃とでもいおうか。ミステリを数多く読んできてもめったに体験できない奇跡の一瞬が、ここにあるのである。

2. ◎『三つの棺』(1935年)(★933カ 早川書房)



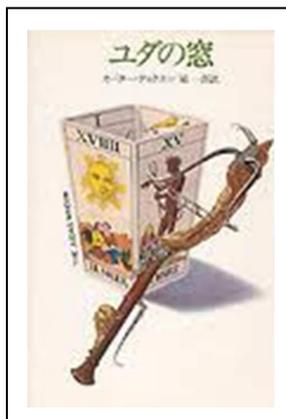
【内容】「生命に関わる重要な話があるので後日訪問したい。」突然現れた黒装束の男の言葉に、酒場で吸血鬼談義をしていたグリモア教授は蒼ざめた。3日後の雪の夜、謎の人物が教授を訪れた。やがて教授の部屋から銃声が聞こえ、居合わせたフェル博士たちが駆けつけると、胸を撃ちぬかれた教授が血まみれで倒れていた。しかも密室状態の部屋から、客の姿は煙のごとく消えていた…。

これは史上最高の密室ミステリである。雰囲気、トリック、そして「密室講義」、どれをとっても超一級品である。ちなみにこの「密室講義」とは、作中の名探偵が古今東西の密室トリックを分類して解説した1章のことであり、ミステリ・マニアならこの論考の中身の濃さだけでうならされてしまうことだろう。

そして作品自体がまた実に素晴らしい。登場する不可能犯罪は二つある。密閉された部屋から消えてしまった殺人者の謎と、出口を監視された袋小路から消えてしまった殺人者の謎。まるで殺人者は吸血鬼で、コウモリに変身して大空に飛んでいったとしか考えられない状況なのである。実際、被害者の悪魔学の権威である教授には、吸血鬼としてよみがえった弟に復讐されてもおかしくない秘められた過去があったのだ。しかし事件はお約束どおりちゃんと合理的に解明される。それは機械的な仕掛けなどは一切使わず心理的な盲点をついた、いたってシンプルなトリックであるのだが、作者の隠し方があまりに巧みなため、真相を見抜ける読者はよほどの推理の達人だけだろう。平凡なわれわれは、素直にだまされ、素直に驚かされ、そして素直に感心させられればよいのだ。

そしてここで名探偵を務めるのが**ギデオンのフェル博士**。カーの作品中最も出番の多い名探偵だ。超肥満型のご老体で、いつも喉をぜいぜいと鳴らしており、赤ら顔、2本の杖に寄りかかることでかろうじて歩行しているといえ、およそ不健康な人物みたいだが、結構元気溌刺で、博覧強記、頭脳明晰で性格は温厚篤実な天才探偵なのである。たいていは、事件に出合ったとたんに直感的に真相を見抜いてしまうほどの天才なのだが、様々な事情ですぐにははっきりとは口に出せず、思わせぶりの言葉を吐いているうちに、周りが勝手に勘違いして事件は一層複雑になったりする。でも本当はとっても優しくて頼りがいのあるサンタクローズみたいなおじいちゃん探偵なのだ。

3. ◎『ユダの窓』(1938年)(★933カ 早川書房)



【内容】結婚の許可をもらおうとアンズウェルは恋人の父親エイヴォリーのもとを訪れる。彼はエイヴォリーに勧められるまま、ウイスキーを飲むと喉に異様な感触をおぼえ意識を失ってしまった。20分ほど経って目を醒ました彼が見た光景は、完全な密室と化した部屋で、胸に矢を打ち込まれて事切れている将来の義父の姿だった。しかもドアには嚴重に鍵がかけられ、被害者と被疑者以外には誰もいない。

弁護士**のヘンリー・メリヴェール**はアンズウェルを無実だと主張して、「どのドアにもある、ユダの窓から矢を射った」というが…。

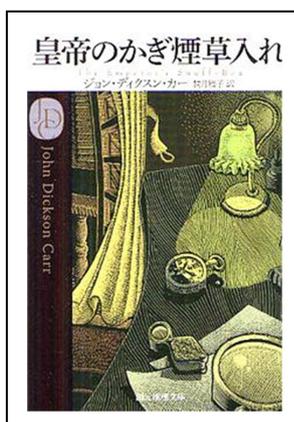
本書は、カーター・ディクソンという名義で書かれている。このよう

に本名と大して変わらない筆名にしたのは、単に出版社の都合だという。そしてこのカーター・ディクソン名義の作品の大半に登場する名探偵がヘンリー・メリヴェール卿（通称H. M）である。H. Mは元英国情報部部長の経歴をもつ英国貴族で、弁護士資格も持っている。禿頭の肥満漢だが、フェル博士と違って意外とスポーツ万能だ。ゴルフも野球もお手のものの活動的なおじいちゃん探偵なのである。一方、その性格は怒りっぽくて毒舌、いつも不平不満を垂れ流している。なのにみんなからは敬遠されることなく慕われているのは、心根は優しく男気のある性格だからなのだろう。しかし年甲斐もなくいたずら好きなのが困ったところだ。特に中期以降の作品では毎回、子供っぽいいたずらによって大騒動を巻き起こしてくれるのだ。これらの爆笑シーンは小説の本筋とは関係のない息抜きのような存在となっている。今回のH. Mはどうやって笑わせてくれるのかと期待して読むのも、カー作品の楽しみ方の一つだろう。

さて本作であるが、これは前期の作だけにまだH. Mはおとなしくしており、爆笑シーンは封印している。しかし名探偵としての活躍ぶりは随一である。目が覚めたら密室の中で恋人の父親の射殺死体とともに閉じこめられていた一人の若者がいた。この若者は当然のごとく殺人の容疑者とされてしまい、裁判にかけられてしまうのだ。密室を破る方法を見つけ出さない限り、犯人は彼しかありえないからだ。そんな絶体絶命の若者を助けんとして、弁護を引き受けたのがわれらがH. M卿だ。彼は弁護士の資格は持っているが実際はプロの弁護士ではない。そんな卿がいかにして密室の扉をこじ開けて若者を窮地から救出するかが、本書の最大の読みどころとなっているのだ。

本書の素晴らしい点は、物語の最初から最後まで舞台が法廷から一步も出ないところだ。こんな単調な舞台設定をすれば、平凡な書き手ならどうやっても読者を惹きつけておくことはできない。しかしカーの手にかかると、これが手に汗握るストーリーと化してしまうから驚きだ。いつもの怪奇趣味も恋愛要素も封印して、ただひたすら事件の解明への興味だけで読者にページをめくらせていくのは、作者にそれだけの技量があるからに他ならない。ここでH. Mは言うのだ。どんな密室にも必ず存在し、しかも殺人者にしか見えない「ユダの窓」という窓があるのだと。ユダとはキリストを裏切った使徒の名だが、この裏切り者の名にちなんだ「ユダの窓」とはいったい何なのか。是非自分の目で確かめてもらいたい。

4. ◎『皇帝のかぎ煙草入れ』（1942年）（★933カ 東京創元社）



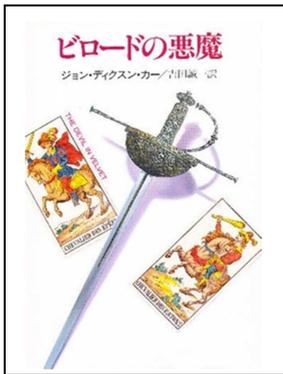
【内容】前夫ネッドと離婚したイヴは、その後向かいの家に住むトビーと婚約するが、ある夜、ネッドがイヴの家の寝室に忍びこみ復縁を迫る。ネッドに部屋から出て行くよう訴えている最中、イヴは向かいの家で殺害されたトビーの父親と、茶色の手袋をはめた犯人と思しき人物が部屋から出て行くところを目撃してしまう。ところが状況証拠からイヴに殺人の嫌疑がかかり、身の証を立てることができない彼女は窮地に陥る。

本書は、カーはアクが強すぎてどうも好きになれないというアンチ・カー派向けの作品である。ここではカーお得意の怪奇趣味もユーモア色もなく、これまたアクの強いシリーズ探偵たち（フェル博士とH. M卿）も登場しない。そしてカーの代名詞でもある不可能犯罪すら出てこないのである。

本書の舞台はフランスの避暑地。ここでヒロインは窓越しに、偶然にも向かいの家に住む老人が殺害された現場を目撃してしまうのである。この時老人が手にしていたのが、「皇帝のかぎ煙草入れ」と名付けられた美術品であった。さてヒロインはこの目撃のことを事情があつて名乗り出ることができないでいるうちに、重要容疑者とされてしまうのである。はたして彼女を窮地から救い出すことはできるのか。

本作ではヒロインをめぐるロマンスが人間関係の中心となっており、カーというよりもむしろクリスティーの作風に近い。実際クリスティー自身も本作を絶賛していたという。またここで使われているトリックは、人間の盲点を巧みにつけた意外なものであり、これまたクリスティーを思わせるものである。カーはこんなタイプの作品も書ける人なのだ。

5. ◎『ピロードの悪魔』（1951年）（★933カ 早川書房）



【内容】 歴史学教授フェントンは昔日のある事件を調べたい一心で悪魔と契約を交わし時を遡った。300年前の同姓同名の貴族に乗り移り、その妻リディアが毒殺された事件を自ら解明しようというのだ。きっかけは、当時の事件の顛末を記した執事の手記だった。なぜか事件解明の部分だけが欠落していたのだ。手記の紛失は一体何を意味するのか？ そして過去の謎に挑むフェントンは、リディア毒殺を防ぎ歴史を作りかえられるのか？

騎士物語を彷彿させる華麗な恋愛模様と壮絶な剣戟（けんげき）場面を織り込み、中世英国を舞台にした幻想的な歴史ミステリ。

後期のカーが熱心に追いかけた一つのテーマがある。それは歴史興味である。これは過去の時代を舞台としたミステリを書くということで、カーは綿密に文献を調査することにより、当時の風俗や社会、言葉遣いなどを忠実に小説の中で再現しようと試みたのだ。これら一連の作品を「**歴史物**」と呼んでいる。ただしミステリ界で歴史物といえば、歴史上の謎や過去の犯罪事件を究明するタイプのものを指すのが一般的であるから、これらは「**時代物**」と呼び換えた方がより正確だろう。そしてこの時代物の最高傑作が本書なのである。

本作の主人公である歴史学者は、かねがね自分の研究対象である3世紀前の英国に行ってみたいと願っていた。それはその時代に生きたある貴族の周囲で起きた一つの殺人事件の真相を是非知りたいと願っていたからだ。そうしたところある日悪魔が現れて、魂と引き替えに過去にタイムスリップさせてやろうと持ちかけてきた。ためらいもなく魂を売り渡した主人公は、念願の過去の時代にタイムスリップして過去の人物に乗り移るや、殺人事件の解明に着手するのだ。しかしまもなく波瀾万丈の冒険の渦に飲み込まれていき、殺人事件どころではなくなっていく。

本作を読むと途中までは、これがはたしてミステリなのかと疑問に思うことだろう。どうみても、これは恋ありチャンバラありの血湧き肉躍る一大冒険絵巻にしか見えないからだ。でもラストで明かされる驚愕の一発大トリックによって、本作がまぎれもなく本格ミステリとして成立していたことが判明する。ということで本作は冒険小説であり、歴史小説であり、恋愛小説であり、SF小説であり、しかも本格ミステリであるという奇跡のような一冊なのだ。これほど面白い物語は古今東西そうざらにあるものではない。そして高校生諸君には、格好の世界史の教材ともなるだろう。

もし本書が気に入ってもらえたなら、◎『**恐怖は同じ**』（カーター名義）と◎『**火よ燃えろ！**』（★933カ 早川書房）という作品も同じ趣向でしかも同じくらい面白い作品なので、是非こちらも読んでほしい。

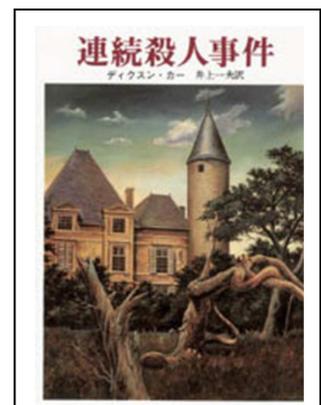


私の一押し!!

このコーナーは、各回のテーマに関して、一般的には特に評価が高い作品ではないものの中から、私が個人的にお勧めしたい作品を紹介する。

◎『連続殺人事件』（1941年）（★933カ 東京創元社）

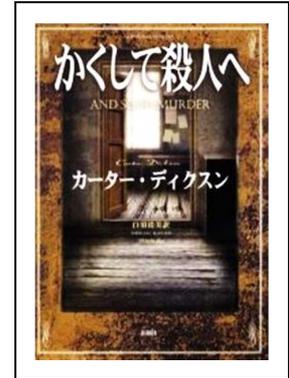
【内容】 妖気ただようスコットランドの古城に起きた謎の変死。塔のてっぺんの寝室から墜落死したのだ。保険金目当ての自殺か、妖怪伝説か、それとも殺人か？ 唯一の出入り口であるドアには鍵がかかっていた。密室の謎に興味をそそられて乗りこんだフェル博士の目前で、またもや発生する密室の死。怪奇と笑いのどたばた騒ぎのうちにフェル博士の解いた謎は、意外なトリックと意外な動機、さらに事件そのものも意外なものであった！



最後にカー初心者には最適の1冊として本書を紹介してみよう。
舞台は幽霊も出るというスコットランドの古城、といういつもの怪奇趣味の恐ろしいお話と思うかもしれないが、実際はまったく違う。これは恋あり笑いありのラブ・コメディであり、ひとかけら怖いところなどないお話なのである。

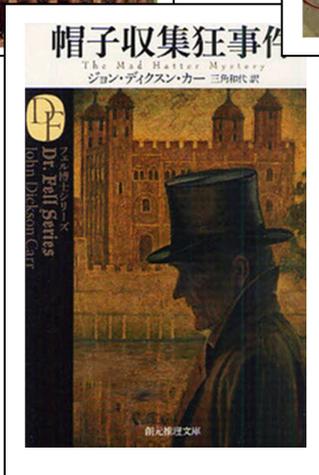
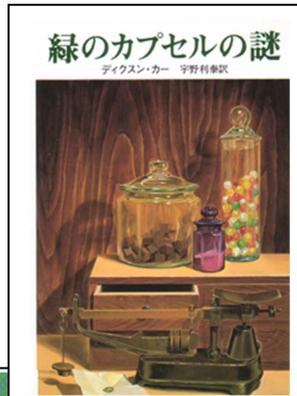
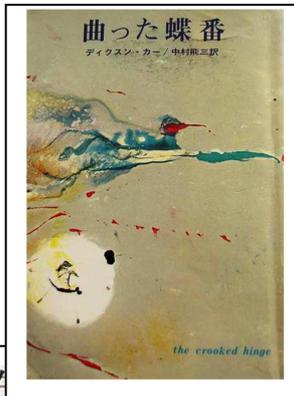
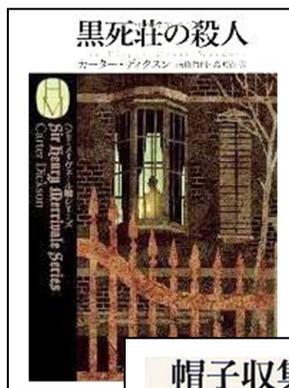
主人公の歴史学者には、学問上の問題について新聞紙上で論争中の天敵がいて、まだ会ったことのないこの論争相手のことを激しく忌み嫌っていた。そんなある日、主人公がスコットランド行きの寝台列車に乗ったところ、手違いで一人の美しい女性と同室になってしまった。しかしこの女性こそがかの天敵であったのだ。のっけから火花を散らして攻撃しあう二人。しかしそんな二人の間にどういふわけか徐々に恋心が芽生えてきて…。はたして二人の恋の行方やいかに!? とこんな話なのだ。この何とも楽しいラブ・ロマンスに抱腹絶倒のドタバタ・コメディがからんで、物語は進展してゆく。読者は作者によって念入りに仕込まれたギャグ・シーンの連続に、只々爆笑しながらページを繰ってゆけばよいのだ。

ここで起こるのは3つの連続する不可解な死亡事件である。殺人なのか自殺なのか分からないところが最大のポイントで、殺人ならいつものごとく不可能犯罪になってしまうというもの。そしてフェル博士の解き明かす真相は、合理的かつ十分に意外性のあるもので、決して期待を裏切るものではないはずだ。カー初体験の人でも、これを読めば必ずやカーの楽しさを理解してもらえることと思う。なおこれが気に入った人には、同趣向のラブ・コメディである◎『かくして殺人へ』（カーター名義）(★933カ 新樹社)と◎『爬虫類館の殺人』（カーター名義）(★933カ 東京創元社)もあわせて読んでみることをお勧めする。



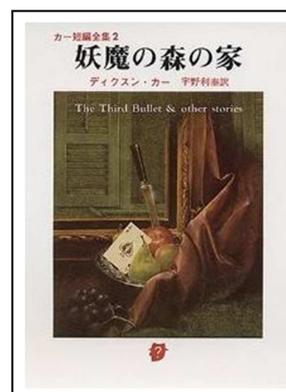
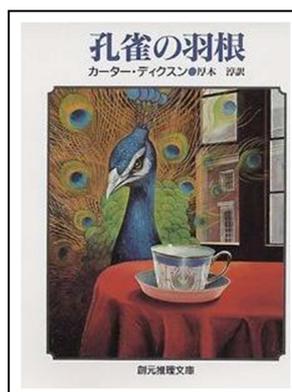
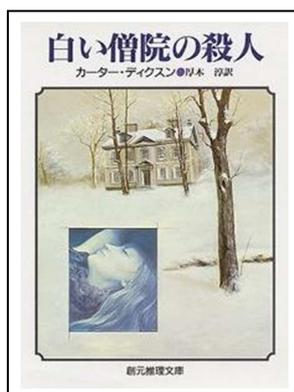
最後にカーのベスト10を挙げておきたい。カーには今のところクリスティーやクイーンのように独立したファンクラブが存在しないので、ここはカー好きを自認する私に任せてもらいたい。といってもこれは私の個人的なベストではなく、あくまでも世評を客観的に考慮した上でのものである。個人的なベストならもっと偏愛にうち満ちたラインナップになってしまうのだから。なお、下記のリストのうち細字の作品は、本文で扱ったものである。

1. ◎『火刑法廷』（1937年）(★933カ 早川書房)
2. ◎『三つの棺』（1935年）(★933カ 早川書房)
3. ◎『ユダの窓（カーター名義）』（1938年）(★933カ 早川書房)
4. ◎『皇帝のかぎ煙草入れ』（1942年）(★933カ 東京創元社)
5. ◎『ピロードの悪魔』（1951年）(★933カ 早川書房)
6. ◎『黒死荘の殺人 [プレグ・コート of the 殺人]（カーター名義）』（1934年）(★933カ 東京創元社)
7. ◎『曲った（曲がった）蝶番』（1938年）(★933カ 東京創元社)
8. ◎『緑のカプセルの謎』（1939年）(★933カ 東京創元社)
9. ◎『帽子収集狂事件』（1933年）(★933カ 東京創元社)
10. ◎『囁く影』（1946年）(★933カ 早川書房)



さらに惜しくもベスト10には入らないが、そのトリックだけを見ると、間違いなく1級品と評価できる作品を、もう5冊追加させてほしい。いずれも極上の不可能トリックが堪能できることだろう。

11. ◎『白い僧院の殺人』（カーター名義）（1934年）（★933カ 東京創元社）
12. ◎『赤後家の殺人』（カーター名義）（1935年）（★933カ 東京創元社）
13. ◎『孔雀の羽根』（カーター名義）（1937年）（★933カ 東京創元社）
14. ◎『爬虫類館の殺人』（カーター名義）（1944年）（★933カ 東京創元社）
15. ○「妖魔の森の家」（『カー短編全集2 妖魔の森の家』所収の短編）（1947年）（★933カ 東京創元社）



【注】1.◎『』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。

○「」は、小説の題名です。

2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。

3.小説の内容については、書体を違えています。